

特集 アクティブ・ラーニングの授業

生徒と共に創る「教えない」授業
— 自立した学習者の育成のための
アクティブ・ラーニング —

山本 崇雄

(東京都立両国高等学校)

1. 「教えない」授業の魔力

「もっとクラス全体が関わり、クラスを巻き込める授業にしたかった」「生徒と話しながら、生徒の反応との関わり合いで授業をすすめられればよかった」「発表の時間を十分にとりたかった」「リーディングの流れを順序よく組み立てておけばよかった」…

これらの反省を読んで思い当たる節がないだろうか。事実、英語の研修会でもこれらはよく聞かれる。だが、これらは、私の生徒（当時中学3年生）が中学最後の授業のリフレクションシートに書いたものである。中学最後の授業では、生徒が「教える」ことに挑戦した。1つのレッスンを6班で分担し、生徒が授業を行う内容である。生徒が指導案を書き、ワークシートを準備し、授業では担当箇所の教師になる。授業の準備段階での議論はまるで教員の研修会のような感じだった。本番の授業で、生徒たちが教師となり、クイズやスキット、自作の動画などを使い、堂々と楽しみながら授業をしていた。そのとき、魔法にかかったように心が震えたのを覚えている。

ここに至るまでには、自立をめざしたアクティブ・ラーニング（以降AL）型の授業があった。自立をめざしたAL型の授業では、生徒は能動的に学習に取り組み、自学力を身につけ、生徒同士教え合い、学び合う集団に育つことができる。本稿では、自立をめざしたALの活動を具体的に紹介していく。

2. 学び方を知るためのAL

(1) 辞書の使い方を知る

自学力を育てる第一歩は辞書指導である。次の写



真は中学1年生の3学期に撮影したものだ。付箋の数は2000を超えている。教科書や英検などの学習で出会った単語を調べた際、付箋を付ける。付箋には調べた順番の番号とその単語をメモする。新しい付箋に次の番号を書いておく。ただそれだけの活動であるが、意欲的に辞書を引き、さらに辞書に愛着がわくようになる。

辞書を引く習慣をつけさせるためには、入門期において、授業中に辞書を引く場面を設定することも重要だ。ペアで問題を出し合ったり、レッスンの新出語をグループで調べ合ったりするとよい。

英語教師をしていると生徒から語義の質問を受けることがよくあるだろう。しかし、「先生、〇〇の意味は何ですか？」に簡単に答えてはいけない。教師に依存するようになるからだ。教師の「説明したい」という欲求を押さえるのも、自立をめざしたAL型の授業では重要なことである。

(2) 文法の学び方を知る

文法の理解も、教師が教え込むのではなく、まずは生徒からわかったこと、調べたことを発信させたい。NEW CROWNでは各文法項目に対する説明のページである「文法の要点」が充実している。レッ

スのまとめで、生徒に白紙を渡し、「文法の要点」や教科書本文を参考に、まとめさせる。集めた後、よくまとまっているものを印刷し、全員に配り、授業で使う。各クラスで、作った生徒に解説してもらい、教師が補足する。



不定詞のまとめ (生徒作品)

生徒は、よくまとまっている作品に学び、毎回、まとめ方のクオリティーを上げることができる。

また、文法は「習うより、慣れる」ことも重要なので、機械的なトレーニングをペアやグループで行うとよい。『たてよこドリル』（正進社）を使えば、簡単にパターン・プラクティスができる。ペアを組み、一人が番号または日本語をランダムに言い、その英文を素早く答えていく（クイックレスポンス）。三単現のsなどは、理屈抜きに反射的に言えるようになる。

15 He plays soccer. 「…は」「～する」「一巻の文(1)～①		
play	plays	Read Read! Read! Read & Write (文・2019)
I () soccer.	I () tennis.	I () baseball.
You () soccer.	You () tennis.	() baseball.
We () soccer.	() tennis.	() baseball.
They () soccer.	() tennis.	() baseball.
He () soccer.	He () tennis.	He () baseball.
She () soccer.	() tennis.	She () baseball.
Ken () soccer.	Ken () tennis.	Ken () baseball.

『英語のたてよこドリル 1年』（正進社）

(3) 本文の学び方を知る

私の授業では教科書の本文を理解させていくために、次の7つの手法を用いている。

① Guess Work

教科書の絵を使い、内容についてのGuess Workを行う。“What (Who) can you see in the picture?” “What’s the story about?”といったやり取りをペアやグループで行い、読む前の準備を行う。

② Jigsaw Reading (4 corners)

教科書本文を4つに分断し、カードにして教室の四隅に貼る。4人組のグループで1人1カ所ずつ分担し、読んで理解したことを共有することによって、本文全体の理解につなげる。「グループのメンバーのために」読むことが動機付けとなり、責任を持って読むことで理解が深まる。この活動の後に、全体を黙読させるとよい（この活動については、本誌特別増刊号Vol.2に詳しく掲載）。

③ Big Questionの提示

授業の最初にレッスンの目標になるようなオープンクエスチョン (Big Question) を提示する。生徒は問いに対する答えを考え続けながら授業を進めて行き、最後に自分の答えを言えるようにするのが1つのゴールとなる。例えば、1年 LESSON 8 School Life in the USAでは、“What are the differences between school life in the USA and in Japan?” “Which do you want to go to, Japanese school or American school?”などが考えられる。この問いの答えを考えながら授業を受けることになる。

④ Q&A

本文に関するQ&Aを6～10問程度与える。生徒は個人、ペア、グループで解答を作る。その後、模範解答を与え、ペアでQ&Aのやり取りを行う。ペアをかえて、同じQ&Aを複数回行うことにより、内容の理解を深めていく。この活動を複数回行い、模範解答のモデル文を何度も繰り返すことによって、適切な答え方も学ぶことができる。

⑤ Picture Drawing

<Read & Draw>

本文を読んで、内容を表す絵を描いて理解を深める。その絵を使って、ペアで内容を説明し合う。

<Listen & Draw>

本文を聞きながら、内容を表す絵や図をメモ的に

描く。聞いて頭の中にイメージしたものを形にするトレーニング。慣れないうちは、1文ずつポーズをし、描く時間を与えるとよい。

⑥ Sight Translation の利用

意味の固まり（チャンク）ごとに改行した文を左に、対応する日本語を右に配列したワークシートを準備する。

例 NEW CROWN 3年 LESSON 6 USE Read より

In 1955, /	1955年に
there were many things/	たくさんがあった
black people /	黒人が
in the United States/	アメリカの
could not do /	できなかった
under the law.//	法の下で。

この Sight Translation Sheet を使って、ペアでさまざまなトレーニングを行う。

<Small Teachers>

ペアでじゃんけんをし、勝った方が先生となって1行ごとにモデルリーディングをし、負けた方は紙を見ずにリピートする。この活動の後、CDを聞かせ、発音を修正させる。

<English-Japanese Quick Response>

クイックレスポンスは、文字通り素早く答えること。ペアで一方が英語を言い、それを日本語に直す。

<Japanese-English Quick Response>

上記の逆で、ペアの一方が日本語を言い、片方が英語に直して行く。これも素早さが重要。

<Reading Aloud>

音読練習も、ペアでお互いに聞き合うようにするとよい。一斉に音読練習をさせるのに比べて、ペアで音読を聞き合う方式は倍の時間がかかるが、「誰かに向かって英語を発信する」ことは重要である。片方の音読を聞いて、内容を要約する指示を出しておけば、聞くことにも集中することができる。

<Shadowing Check>

シャドーイングとはCDの音声に2～3語遅れて、発音をまねながら音読するトレーニングである。これも、ペアで活動し、一方がシャドーイングをし、もう一方が聞く。これも、聞く人がいるだけで、活動のモチベーションが上がる。

⑦ Oral Presentation

①の Guess Work で使った絵を使い、内容を英語で説明する。最後に、③で示した Big Question の答えを述べる。学年が進むにつれて、Big Question の内容を充実させ、意見を言うことに重点を傾けていくと論理的なスピーチの指導へとつながる。

(4) ペアワーク・グループワークの工夫

①ルール

以上述べてきた様々なタスクをスムーズにこなしていくには、学級の集団作りが欠かせない。英語の授業では以下のことをルールとして大切にしている。

Everyone should ...

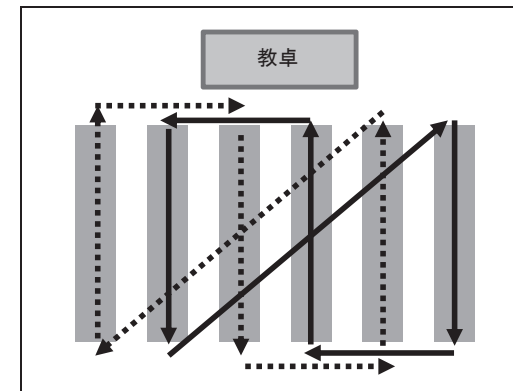
1. Listen, speak, read, write and move.
2. Enjoy making mistakes. (Use English.)
3. Say, "Thank you." when your friends do something for you.

ルール1の最後にある“move”は教室中を動いているということを意味する。例えば、グループワークで行き詰まったとき、他のグループに行き、アイデアを得ることもできる。クラス全体で足りない所を補い合い、伸びていくイメージである。ルール2では、まず、生徒に間違いを恐れず発音に挑戦させることから始めるとよい。教師の“Repeat after me.”は、時に“Don't make mistakes.”と伝わる。まずは、生徒にやらせて、安心して失敗させ、その後“Repeat after me.”“Listen to the CD.”で誤りを修正させるとよい。この力は自宅でCDを使って、自分の発音を修正して学んでいく力につながる。ルール3は、最も重要だと考えている。学校生活の中で、感謝したり、されたりする場面は意外と少ない。私の授業では英語を話すときは必ず聞き手が存在する。そのことに感謝し、“Thank you.”を言う。この経験が、自分の存在意義を高め、クラスを居場所と感じ、クラスを「互いに認め合い、学び合う集団」に育てていく。

②フォークダンスのようにペアをかえる

私の授業では、下図のようにタスクごとに右また

は左の列が動いてフォークダンスのようにペアが変わる。ペアをかえることにより、同じタスクも複数回飽きずに行うことができ、友達の表現から学びながら自分の表現の幅を自然に広げることができる。また、ペアがどんどんかわっていくので、人間関係もあまり問題にならなくなる。私の授業では1つの授業で10～20個のタスクを行い、ペアをかえるので、1回の授業で10～20回“Thank you.”を言い合い、お互いを認めることにつながっている。



③ Think-Pair-Share

質問をクラスに投げかけるときは、まず一人で考える時間を与え(Think)、隣の人と意見交換をし(Pair)、クラス全体で共有する(Share)するステップを踏むと意見を言いやすい雰囲気を作ることができる。

3. 自立させるためのAL

学び方を知ることができれば、課題達成のために、学び方を適切に選択し、実行する力を育てたい。

(1) 学び方を選択させる

授業の最初に、目標を示し、それに向かって個人、ペア、グループで学習方法を選択させ、能動的に学習させる。具体的には、「〇時〇分まで教科書 p.〇の絵を使って内容を英語で話せるようになる」や「〇時〇分に p.〇の単語テストを行う」のように目標は具体的な方がよい。2で述べた「学び方」を理解していれば、目標達成のための学び方を選択することができる。

(2) 生徒に授業をさせてみる

1で述べたように、レッスンを班の数で分け、それぞれに授業を作らせる。教員では思いつかないようなアイディアに出会うことができ、生徒から学ぶことができることを実感できるであろう。

4. AL 型の授業で求められる教師の役割

(1) 安心安全の場を作る

先に述べたように、モデルを示すのは極力あとにし、最初に生徒を活動させる。主体的かつ積極的な学びから生まれた失敗は学習のモチベーションになる。

また、「説明する」「怒る」など教師が主体となることは、時に自立した学習者を育てることを阻害する。「怒られるからやる」は、教師に依存しており、自立した学習のモチベーションからはほど遠い。教師のコントロールをゆるめ、失敗を許す環境が、教室を生徒にとっての安心安全の場に変えていくのである。

(2) ファシリテーターとして生徒の活動を支える

「説明する」ことは、決して不要ではない。ただ、できるだけ短くしたり、「反転授業」の手法で、家庭で解説の動画を視聴できるようにしたり、工夫が必要だ。生徒が教室で教師に依存しすぎることがないように、生徒を支援していくファシリテーターとしての役割がこれからの教師には期待されている。

5. 「教えない」授業の魔力

お気づきのように、「教えない」授業とは生徒を放置することではない。「教えない」授業をめざすために「学び方」を徹底的に繰り返し、自立して学ぶための学びの選択肢を増やしてあげる必要がある。そして、生徒が自主的に動く「教えない」授業では、生徒は目を輝かせ、時に身を乗り出しながら熱中して学ぶ。その主体的な姿には教師を虜にする「魔力」がある。この喜びは「教え込み」型の授業では決して生まれえない。自立をめざしたAL型の授業の先には、生徒が自立した「教えない」授業が待っているのである。